

資料

看護学科におけるカリキュラムの再構築とその概要

永谷 智恵・笹木 葉子・高岡 哲子

(2012年12月26日受稿)

抄録： 本学科は、平成24年度より新カリキュラムによる教育を開始した。平成21年、教員間から現行カリキュラムについて、教育理念と教育内容の整合性、科目間における教授内容の重複や実習進度などの問題等が提起され、完成年度に向けて根本的にカリキュラムを再構築することになった。

再構築におけるカリキュラム特徴は、本学の教育理念に則り、加えて看護系大学の社会からの要請に応え①人間の生命の尊厳、倫理感を備えている、②ヒューマンケアリングの視点に立った看護実践能力、③他職種と連携、協働できる基礎的能力、④地域社会、国際社会に貢献できる能力、それらを有する人材の育成である。その構築過程は、看護の主要概念、内容の諸要素、教育理念、教育目標、学年目標、理論的枠組みに基づくカリキュラム軸、レベル目標と科目原案の段階を経て進められた。

再構築する過程で、保健師助産師看護師学校養成指定規則の一部改正に伴い、本学はそれまでの保健師看護師の統合カリキュラムから看護師教育の一本化に変更して、新カリキュラムを完成させた。今後、組織全体で議論を重ね、段階的に評価しながら、看護教育の更なる質の向上をめざしていく。

I. はじめに

本看護学科では、平成20年4月に開設。平成24年3月に4年間の教育課程を修了し第1期生を社会に輩出した。開設2年目、カリキュラムの進行に伴い、教員間から現行カリキュラムについて様々な問題が提起された。それは、看護学科の教育理念が明らかではなく、教育内容、教養科目・専門基礎科目・専門科目の整合性、専門科目の教育内容の重複や実習時期と開講科目進度のずれ、他である。カリキュラム委員会では、カリキュラム全体を根本的に見直し看護教員によって意図的に再構築する意向が示された。

再構築する過程で、保健師助産師看護師学校養成指定規則の一部改正に伴い、本学科はそれまでの保健師看護師教育の統合カリキュラムから看護実践能力の充実に向けて看護師教育の一本化に変更することを決定して、新カリキュラムを完成させた。

カリキュラムの構成は、4段階からなり、①方

向づけの段階（後に続くすべての段階の基礎となり、カリキュラム全体に方向性を与える）②形成段階（方向づけの段階において明らかにした理論的枠組みに基づき、カリキュラムに意味と形態あたえる）③機能段階（カリキュラムの実行）④評価段階（卒業生の特性をどの程度達成したか）である。今回は、方向づけの段階から形成段階までの作成過程と再構築したカリキュラムの概要について報告する。

II. カリキュラム再構築の過程

1. 現行カリキュラムの問題点

全教員から現行カリキュラムについて意見を聞き、カリキュラム委員会においてシラバスと照合しながら検討した。多くの問題が提起され、その概要を次にまとめる。

《問題点の概要》

①教育理念が明らかではなく、教育内容、教養科目・専門基礎科目・専門科目の整合性が不明瞭

- ②看護学の基礎となる教養科目の不足
- ③科目間の教授内容の重複と不足
- ④科目の進度と実習時期の順序性のずれ

上記の問題提起を受け、当初のカリキュラム委員長でもある学科長から、カリキュラムは系統的、論理的、力動的である、特に教育理念、教育目標と科目の整合性をもつことは、看護教員が意図的に体系化する必要がある、完成年度を睨んで本学科の重要課題として位置づけた。ここにカリキュラムの再構築が始まった。

2. 「方向づけの段階」カリキュラムワーキンググループの取り組み（平成21年9月～平成22年3月）

平成21年9月、カリキュラム再構築に向けてカリキュラム委員会のもとにワーキンググループ（以後、ワーキングとする）が立ちあがった。構成メンバーは、カリキュラム委員長（学科長）を中心としてカリキュラム委員3名の計4名である。カリキュラム作成過程については、資料¹⁻⁴⁾ 文献^{5,6)}を参考にし、集中的に学習と並行してカリキュラム原案を作成していった。内容についてはメンバー各自の教育経験から意見を出し合い共通理解できるまで、週2～3回、時間をかけて検討を重ねた。

「方向づけの段階」のカリキュラム再構築の取り組みは、「主要な概念に基づく理論的枠組み」、「教育理念」、「教育目標」、「卒業生の特性」、「理論的枠組みに基づくカリキュラム軸」である。

作成した原案は、カリキュラム委員会で検討後、学科会議で全教員の合意を得る方法をとった。

3. 「形成段階」カリキュラム小委員会の取り組み（平成22年6月から平成23年1月）

形成段階は、方向付けられたカリキュラムの理念を系統的に教育内容に具現化していく段階である。形成段階の取り組み内容は「カリキュラムデザイン」、「教育目標とレベル目標」、「学年目標」、「看護領域別の内容配置図」、「カリキュラム改正に伴う教育課程の検討」、「教育科目」、「時間割案」、「指定規則との照合・確認」である。

この作成過程は、方向づけられた教育内容を一

つひとつカリキュラム軸と照らして具体的に取り決めていく。教科内容と密接につながるため、看護学領域（基礎、成人、老年、小児、母性、精神、地域）から教員各1名計7名で、新たなカリキュラム委員長を中心にカリキュラム小委員会（以後、小委員会とする）を立ち上げた。

カリキュラム再構築の完成目途は、大学での教授会での承認、文部科学省への申請時期を考え平成22年12月を予定した。完成までに与えられた構築期間は約半年間、教育内容を各看護領域で密に検討する必要がある、定められた期間の短さに比べ、検討内容は膨大であった。

小委員会の会議はメンバー全員が出席できるように、実習の学内日や実習終了後の時間帯を選んだが、委員全員の参加は難しく、最終的にワーキングから継続した筆者1名と小委員会メンバーである筆者2名が作業の中心となった。

カリキュラム過程は、学習領域とそれに関連するあらゆる側面を組織化するための系統的アプローチである。そのためには教員全員の意見を集約して進めていく必要がある。小委員会では質問紙調査を行い、必要時は個別にヒヤリングを行って意見を集約し、学科会議で全員の意思統一を図った。

4. 「形成段階」カリキュラム委員会での検討（平成23年1月～平成23年5月）

形成段階の教科内容にかかわる目標、内容まで終了して、カリキュラム進行する上で全体に関わる取り決め事項についてカリキュラム委員会で検討した。

取り決めた事項は、「卒業要件」、「進級要件」、「新カリキュラムの移行に伴う旧科目との互換科目」、「科目の担当教員」である。

Ⅲ. カリキュラムの再構築の概要

1. 教育理念、教育目標、卒業生の特性、用語解を本学の特徴を鑑み成文化する

本学は「豊かな人間性」「健全な社会性」「高度な専門性」を基盤として、「実学重視」、「国際社

会の発展」「地域社会との連携」等を目標に掲げている。看護学科においても、それらは重要な姿勢と捉え教育理念の基盤として据えた。初代学長の学訓である「他者の立場に立って考える心」は看護者が患者を独自の存在として寄り添い、患者の感情、思いを受け止め、個別の看護ケアを提供する「ヒューマン・ケアリング」の言葉に置き換え教育目標に組み入れた。(用語解参照) また、

社会から看護系大学に求められている「確かな倫理感」「看護実践能力」を重要項目として目標に組み入れた。さらに本学は、人間科学部の5学科および外国語学部が設置されている学習環境から「他職種との連携・協働」、「国際社会の発展に寄与する」を教育目標に組み入れ特徴づけた。教育目標から卒業生の特性を導き出し成文化した。(表1)

表1 教育理念・教育目標・卒業生の特性、用語解

【 教育理念 】

豊かな人間性と幅広い教養、高度な専門性を身につけ、人間の尊厳と確かな倫理観を備え、社会的要請に応じ地域社会並びに国際社会に貢献し、看護の発展に寄与できる人材を目指す。

【 教育目標 】

1. 豊かな人間性、幅広い教養と多様な個性を発展させ看護の対象である人間の生命や権利を尊重し、全人的に理解する能力を養う。
2. 人間の生活の場において、その人がクオリティ・オブ・ライフを高めることができるように、ヒューマン・ケアリングの視点に立った看護実践能力の基礎を養う。
3. 看護実践に内在する倫理的諸問題を認識し、専門的価値に基づく倫理的判断力の基礎を養う。
4. 主体的、科学的に思考し、かつ創造的に問題や課題を探究し解決していく能力を養う。
5. 保健・医療・福祉システムの中で、他領域の職種との連携・協働の重要性を理解して、目標に向けて推進できる基礎的能力を養う。
6. 国際的な視野を養い、多様な価値観に基づく社会の中で、人々の健康に貢献しながら自己の成長を希求する態度を養う。

【 卒業生の特性 】

1. 人間の生命の尊厳、倫理感を備えている
2. ヒューマン・ケアリングの視点に立った看護実践の能力を有する
3. 他職種と連携、協働できる基礎的能力を有する
4. 地域社会、国際社会に貢献できる資質を有する

《用語解》

・ヒューマン・ケアリング

看護者が患者を独自の存在として寄り添い、患者の感情、思いを受け止め、個別の看護ケアを提供する一連のプロセス (他 省略)

2. 看護教育の主要な概念に基づく理論的枠組み

看護という専門領域を概念化するために、最初に教員各自の看護、教育に関する信念を出し合い、「人間とは」、「環境とは」、「健康とは」、「看護とは」について、看護学教育の主要な概念を明らかにして、理論的枠組みを作成した。(表2)

3. 看護教育の主要な学習内容「内容の諸要素」を導き出す

本学の建学の精神や目標を基盤として作成した看護学科の「教育理念」、「目標・卒業生の特徴」および主要概念「人間」、「環境」、「健康」、「看護」

から、看護教育における基本的な知識、理論、技術、態度の中心かつ主要な学習内容を導き出し「内容の諸要素」とした。(表3)

4. 学習の進度と学習内容の順序に方向性を与えるカリキュラム軸(骨格)を作成する

カリキュラム軸作成の方法論⁸⁾を参考にしながら、「内容の諸要素」で抽出された知識、理論、技術、態度の項目を類似性・相違性に基づいて分類し、カリキュラム軸を作成した。垂直軸は学年進行に伴い積み上がる教育内容である。水平軸は学士課程4年間のどの学年にも共通して強調される教育

表2 主要な概念の理論的枠組み

概念	人間	環境	健康	看護
理念 ・命題 *信念	<p>人間、一人ひとり、身体的にも精神的にも固有の存在である。同時に家族、地域社会、国家、世界の中で、互いに尊重され、他者と相互行為を繰り返しながら成長し、調和を取りあい生活する社会的存在である。</p> <p>人間は、価値、自立性、独自性を持ち、受胎から死に至ってもなお永遠に尊厳をもつ存在である。</p> <p>・人間は、身体的、精神的、社会的側面の統合体である。</p> <p>*人間は基本的ニードを持つ存在である。</p> <p>*人間は成長発達する存在である。</p> <p>*人間は自然治癒力を持つ存在である。</p> <p>・人間は環境と相互行為し、環境の中で生活する。</p> <p>*生活と健康の調整は、環境における各個人の相互行為(作用)によって影響を受ける。</p> <p>*人間は互いに尊重されうる存在である。</p>	<p>環境は人間を取り巻く世界であり、人間との相互作用を持つ。</p> <p>・(人間はあらゆる環境の中でも、より良い健康な生活を実現できる可能性がある。)</p> <p>環境には、内的環境と外的環境があり、人間の生活に影響する。</p> <p>外的環境には自然環境、社会環境があり、これらは相互に影響し合う。</p> <p>・内的環境とは、体内環境を指す。</p> <p>*体内環境は生体の内部環境であり、相互に影響し合う。</p> <p>*人間は、内的環境の恒常性の維持に向けて、外的環境と相互行為する。</p> <p>・外的環境と内的環境は相互に影響し合う。</p> <p>*外的環境は内的環境の恒常性の維持に関与する。</p> <p>*人間は、内的環境の恒常性の維持に向けて外的環境と相互行為する。</p> <p>・環境は時間と共に変化する。</p> <p>*環境は常に変化し続ける。</p> <p>*環境と人間の相互行為は環境の変化に深く関与する。</p>	<p>健康とは、生命や生存を維持し、存続させ、生活や人生を高めていく個人や集団などの主体的な統御能力であり、環境との相互作用により力動的に変化する。最良の健康は、個人や集団のもつ可能性を最大限に発揮できる状態である。</p> <p>健康とは人間が日常生活において、自らの能力を最大限に発揮している動的状態を指す。その状態は諸能力を最適条件で活用することによって内的、外的環境からくるストレスに対して、継続的に調整する一つの連続体であり、一層高い可能性を目指して変動する動的存在である。</p> <p>*健康の状態は、人間と環境の相互行為に影響を与える。</p> <p>*最高水準の健康状態の獲得には、外的環境、内的環境における恒常性の維持が必須である。</p> <p>*病気という健康状態は、環境に対し生体の恒常性を維持できないときに出現する。</p> <p>*正常から逸脱した健康の状態とは、身体的不均衡状態、心理的不安定状態、社会的葛藤状態を意味する。</p> <p>最高水準の健康は、人間が達成しようと絶えずそれに向けて努力する人間であり、目標である。</p> <p>*人間は、人種、宗教、政治的信念、経済的あるいは社会的区別なしに、到達しうる最高水準の健康に向けて、一層高い可能性を目指す。</p>	<p>看護は、生活の場において、その人がクオリティ・オブ・ライフを高めることができるように関わる実践プロセスである。そのプロセスは、人間性と科学から引き出された知識、技術、態度を基盤として展開する。それを通じてお互いのクオリティ・オブ・ライフを高めよう。</p> <p>看護の対象は、健康を正常範囲保つために環境との相互行為を重ねている人間である。</p> <p>看護とは、看護技術を媒介とし看護の目標達成に向けた、看護師とクライアントとの人間的な相互行為の過程である。</p> <p>*看護の目標は最高水準への健康への到達、保持、回復、疾病の予防、あるいは死に臨む人間の安寧に向けて、個人並び集団を援助することである。</p> <p>*看護は人間の生活の中で健康を実現する。</p> <p>看護師は人間を最高水準の健康へ導くような方法で環境と相互行為を重ねる。</p> <p>*看護は人間の基本的ニードにかかわる潜在的問題・顕在的問題に関与する。</p> <p>*看護師は、健康の査定、看護の計画、実施、評価という一連の過程を展開する。</p> <p>*この一連の展開には、人間の正常な行動一般についての知識と、個人が環境と相互行為する方法の理解を前提とする。</p>

内容である。それぞれ5つ抽出，分類され教育内容の構造化をはかった。軸の内容を簡単に説明する(図1)。

垂直軸：看護を考え実践する軸として「看護」を置いた。看護の概念などの基礎的な知識から看護の展開技術，研究，そして実践能力を高める実習を柱とした。次に看護の対象の健康を捉える軸として「健康の状態」を据えた。身体についての構造機能，健康概念から始まり，健康な状態から，それを逸脱して死までを柱にした。「対象の生活を取り巻く環境」は看護の対象である人間が

環境と相互作用している生活を捉える軸として据えた。人の生活する環境，生活環境システムから，さらには災害や被災地などの生活環境までを柱にした。「看護の対象である人間」は看護の対象である人間を捉え，その関係性形成を考えた軸として据えた。看護の対象について個から家族，そして地域，集団というような対象の広がり看護の対象との関係形成，関係性の構築を柱にしている。「看護専門職の役割・責務・機能」は看護を社会から求められる職業として捉えた軸で，看護職としての役割や連携，倫理，法的，管理を柱にした。

表3 内容の諸要素

内容の諸要素	知識・理論・技術・態度	教育理念	教育目標・卒業生の特長	人間	環境	健康	看護
		豊かな人間性 看護の発展 高度な専門性 研究 豊かな人間性 幅広い教養 確かな倫理観 人間の尊厳 地域社会 国際社会	人間の生命の尊厳、倫理観 地域社会、国際社会、全人的理解 ヒューマン・ケアリングの視点 倫理的判断能力 主体的、科学的な思考 主体的、科学的、創造的に問題や課題を探究 保健・医療・福祉システム 他職種との連携・協働 リーダーシップ 国際的視野、多様な価値観の認識 自己の成長を希求する態度の育成 看護管理マネジメント 看護実践者 地域社会、国際社会に貢献 看護専門職、研究 役割、責任・責務	心理学、社会学、哲学 倫理学、経済学、宗教 生活統合体としての人間 生活に価値をおく 基本的ニード セルフケア 人間発達 自然治癒力 認識論、ストレス対処 マズローの欲求の法則 コミュニケーション パーソナリティ 人間の自立性、独自性 人間の尊厳に価値をおく 実存的存在 身体的存在 社会的存在 精神的存在 現象学のアプローチ 人間が認知行動面の回復を果たす存在であることを価値をおく	文化、文化人類学 政治学、経済学、 自然環境(気象、気候、風土) 内的環境 外的環境 システム、恒常性 多様で変化し続ける環境との相互行為をもつ 社会的、自然的環境の変化に働きかける人間の生活を整える	人間のからだのしくみ 病気の概念、健康レベル、 健康概念、 生体の恒常性 正常からの逸脱(身体的不均衡、心理的不安定、社会的葛藤) ヘルス・アセスメント 継続的に調整する一つの連続体としての健康 ストレス対処、 危機 諸能力を最適条件で活用する 日常生活において、自らの能力を最大限に発揮する 環境と相互行為し、最高水準の健康に向けて、一層高い可能性を目指す 健康状態の明確化 目標、価値としての健康	看護の対象、看護の目標 教育学 看護関連法規、専門職 最高水準の健康への到達、保持、回復、疾病の予防 死に臨む人間の安寧 クオリティ・オブ・ライフ ヒューマン・ケアリング クライアントとの人間的な相互行為の過程 コミュニケーション 個別的看護 集団、地域への援助 看護技術 看護過程 人格的成長を促す教育的手段 役割、責任・責務 寄り添い、受け止める

レベル	看護	健康の状態	対象の生活を取り巻く環境	看護の対象である人間	看護専門職の役割・機能・責務
IV	看護研究、統合実習、継続看護	グループケア、ターミナルケア	災害看護、国際協力と支援	特殊な環境や状況における援助関係の理解、集団、集団対集団の援助関係形成の技術、地域保健、健康教育	看護倫理、チームアプローチ、リーダーシップ、リスクマネジメント、医療組織の管理、継続看護
III	看護の概念、看護の領域の背景となる看護諸理論、日常生活援助の基本技術、診療に伴う基本技術、フィジカルアセスメント、ポディメカニクス、看護過程展開の技術、基礎看護実習、コミュニケーション技術、患者・看護者相互作用の理解、個人・家族の援助技術	ヘルスプロモーション、リプロダクティブ・ヘルツ、さまざまなライフサイクル、発達段階にある対象の健康問題、ケオリティイ・オブ・ライフ	医療現場で発生する倫理問題、課題、保健医療福祉システム、生活環境、生活の場、在宅での生活	カウンセリングの理論と実践、ヒューマン・ケアリング、現象学的アプローチ、家族・家族関係、家族役割、患者看護者相互作用の理解、人間のさまざまな状況理解のための理論（ストレス対応、危機理論など）	医療に関わるさまざまな職種の機能と役割、医療の歴史と医療観、看護・看護職に関わる法律
II	統計学理論と技術、論理的思考	健康についての考え、健康の定義、人体の構造・機能、Well-being、疾病の成り立ちと回復過程、適応、適応・老いの受容、障害の受容、身体・精神・生活障害、家族のライフステージ	自然環境と生活、公衆衛生、医療・保健政策、医療経済、社会資源、社会福祉	コミュニケーション理論、自己意識、自己理解の促進、自己決定、自己実現する人間、人間関係論、生命倫理、臨床心理学、生命の尊厳の理解、社会的存在としての人間、家族のライフステージ	
I		生命科学	社会科学系、文化人類学系、異文化理解	生命科学・生命の尊厳の理解、人間発達学、心理学、哲学、宗教	社会心理学

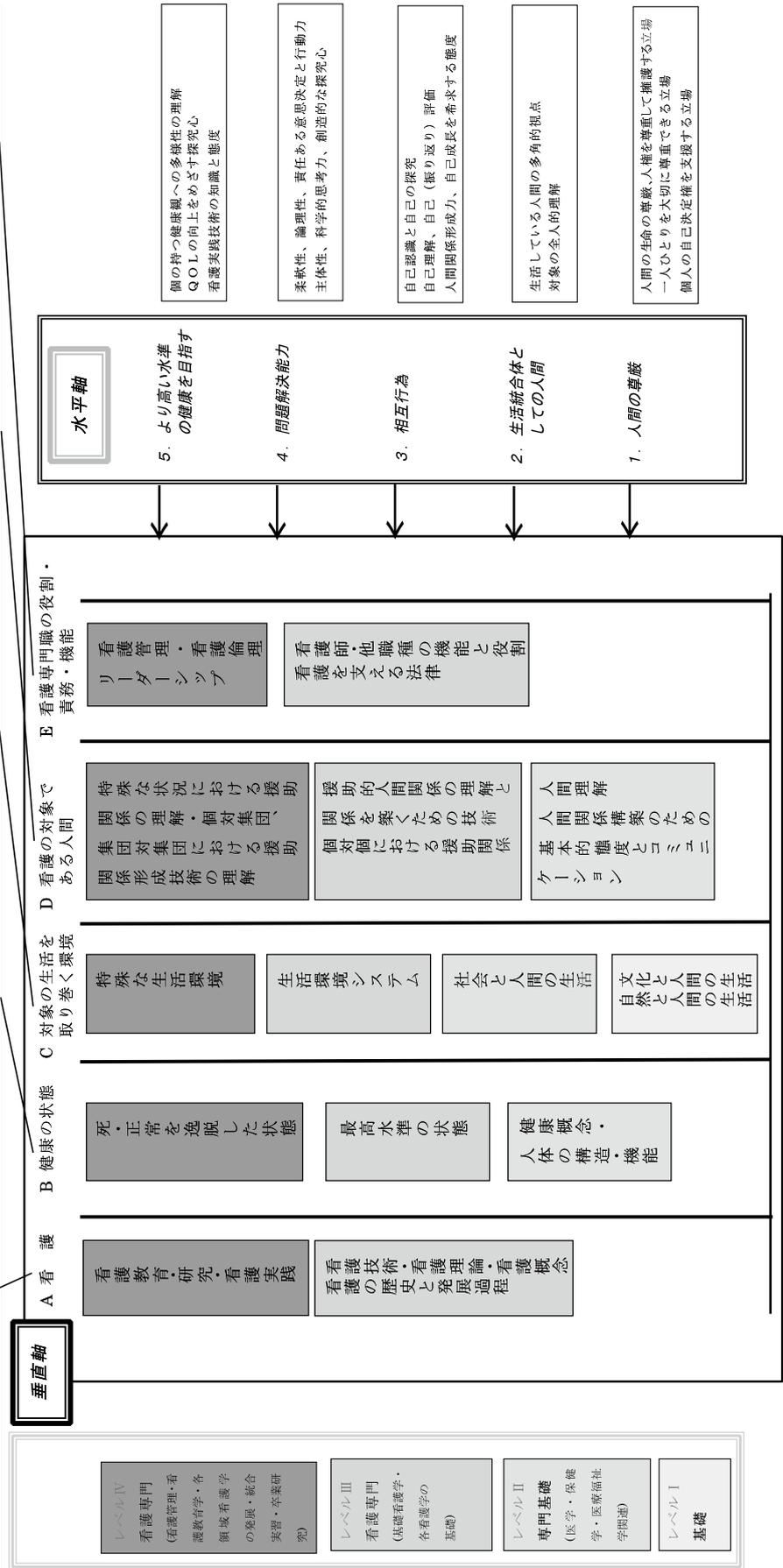


図1 理論的枠組みに基づくカリキュラム軸

水平軸：「人間の尊厳」は人間の尊厳を守り養護していく、対象を命ある人間としての存在価値を大事にした軸である。生命の尊厳、養護、対象の自己決定を支援する内容を入れた。「生活統合体としての人間」は身体的、精神的、社会的存在である、生活している統合体である人間、全人的な人間を捉えた軸とした。生活している人間の多面的理解、全人的理解を入れている。「相互作用」は多様で変化し続ける環境との相互行為をおこなう軸として、看護の対象と相互行為している自己理解と自己成長を希求する態度の育成を入れている。「問題解決能力」は問題解決するために求められる姿勢の軸として、主体的、科学的思考、柔軟性、論理性、責任ある意思決定と行動力を養う内容とした。「より高い水準の健康を目指す」は対象の健康を求める姿勢と理解の軸として、健康観の多様性、QOLの向上、看護実践能力への態度を育成する内容とした。

時間枠内で運用を具体的にするために、基礎、専門基礎、看護専門科目の基礎、看護専門科目の発展というⅠ～Ⅳのレベルを積み重ね設定した。

5. 教育目標から達成するレベル目標を明確化する

教育目標1～6の中心は「人間理解」、「看護の実践能力」について、健康レベルに応じた看護展開技術と対象との相互行為、人間関係形成、「専門職としての倫理観」、「主体的、科学的思考」、「他職種との連携・協働」、「国際的視野、自己成長」である。それぞれに、到達目標を設定し、6つの教育目標それぞれに強調される水平軸と垂直軸の交わる各レベルで、達成する目標をレベル目標として言語化し、レベル目標と学科目標に流れる理論的根拠を明らかにした。レベルⅠ～Ⅳはカリキュラム軸と同様に基礎から専門の発展レベルの意味合いを持たせ、累積的な行動目標として示した。それぞれに必要な科目名を目標の下に記した。(表4 科目名は割愛)

6. 卒業生の特性から学年目標を明確化する

卒業生の特性から各学年において、到達すべき学年別行動目標を明確化した。(表5) これによ

て、各学年終了までに到達すべき目標が明確になった。

本学科のカリキュラムデザインは、看護に必要な豊かな人間性と幅広い教養、確かな倫理観のための基礎科目を一年時に幅広く学び、専門科目は一年時から学年進行に合わせて徐々に増加していく漸進型を取っている(カリキュラムデザインも作成しているが、今回は割愛する)。漸進型のため、レベル目標と学年目標との関連を明確にするため、目標の横に(教育目標番号 - レベル数値)を示した。

7. 現行カリキュラム評価、教員の意向調査

新カリキュラムを具体的な科目内容まで確定する前に、全教員20名に現行カリキュラム、大学の設備、教員数等について30項目の調査を行った。その結果、カリキュラムについては、カリキュラムの順序性、開講時期、教育理念の反映など、再構築開始前に提起された問題とほぼ同じ内容が出され、全教員の意思統一につながった。

8. 看護領域ごとの内容配置図(科目内容原案)

看護7領域ごとに科目内容の原案を作成する。理論的枠組に基づくカリキュラム軸で定められた内容、レベル1～Ⅳに添って主要な学習内容を組み入れた。小児看護学の一例を図2で紹介する。これにより、カリキュラム軸に添った科目目標へと具現化・焦点化し、看護領域ごとの全体像が明確になる。さらに、カリキュラムの垂直軸の科目目標ごとに、内容の諸要素、強調する軸の焦点、概念・理論、学習内容、関連する科目名を内容配置図に記述して整理して、科目名を決定した。一例として小児看護学概論を表5で示す。この内容は、機能的段階において、直接、展開する内容となる。科目の学年配置については学年目標と照らし配置した。各看護領域のカリキュラム軸、内容配置表、科目配置表をもとに、カリキュラム委員会で検討し、看護領域間における学習内容の重複や不足、科目の順序性について確認を行った。統合カリキュラムから看護教育カリキュラムへ変更することが決定され、在宅看護論を組み入れた。

表4 レベル目標と科目原案

※ (科目原案は表から外して表示)

教育目標	到達目標	強調される キャリアラム軸	レベルI 基礎科目	レベルII 専門基礎科目	レベルIII 専門科目	レベルIV 専門科目
<p>教育目標1 豊かな人間性、幅広い教養と多様な個性を発展させ看護の対象である人間の生命や権利を尊重し、全人的に理解する能力を養う。</p>	<p>看護の対象である人間についての幅広い知識を用い、人間の生命や権利を尊重し、生活統合体としての人間を理解する。</p>	<p>(垂直軸) 看護の対象である人間、対象の生活を取り巻く環境、看護の対象としての人間、人間の尊厳</p>	<p>人間の生命や生活、および文化との相互作用に関する基礎的な知識を修得する。</p>	<p>身体的、精神的、社会的存在として、生活している統合体としての人間を多角的視点で理解できる。</p>	<p>看護の対象としての個人、家族、地域の多様性について理解する。</p>	
<p>教育目標2 人間の生活の場においてその人がクオリティ・オブ・ライフを高めることができるよう、ヒューマン・ケアリングの視点に立った看護実践能力の基礎を養う。</p>	<p>看護の基礎技術を応用して、あらゆる健康レベルにある人のクオリティ・オブ・ライフを高め、その人の生活を援助できる。</p>	<p>(垂直軸) 看護、健康の状態、対象の生活を取り巻く環境、看護の対象である人間 (水水平軸) より高い水準の健康を旨とする、相互行為問題解決能力</p>	<p>健康についての考え方および、健康状態の変化と疾病や生活との関わりについて理解できる。</p>	<p>対象の抱える様々な健康上の問題を解決するための看護基本技術について修得する。看護展開に必要な知識を修得して判断力を養う。</p>	<p>対象の抱える様々な健康上の問題を解決するための看護基本技術について修得する。看護展開に必要な知識を修得して判断力を養う。</p>	<p>発見的な看護技術および特殊な状況における援助的人間関係について理解する。家族、地域に対する基礎的な援助技術が修得できる。</p>
<p>教育目標3 看護実践に内在する倫理的諸問題を認識し、専門的価値に基づく倫理的判断力の基礎を養う。</p>	<p>人間の生命の尊厳を守り、対象者の立場を尊重する行動や態度をとることができる。</p>	<p>(垂直軸) 看護の対象である人間、対象の生活を取り巻く環境、看護の対象としての人間、人間の尊厳</p>	<p>生命倫理並びに生命倫理に纏わるさまざまな治療上の歴史や課題について理解する。</p>	<p>生命倫理及び実践現場における看護倫理の基本を理解し、自己の倫理観を点検する。実践現場において倫理的葛藤が生ずる状況における倫理的葛藤が理解できる。</p>	<p>生命倫理及び実践現場における看護倫理の基本を理解し、自己の倫理観を点検する。実践現場において倫理的葛藤が生ずる状況における倫理的葛藤が理解できる。</p>	<p>実践現場において倫理的葛藤が生ずる状況を理解し、その状況における倫理的葛藤が理解できる。対象者の尊厳と権利の利得に基づき、対象者の自己決定を支援し、対象者を擁護する行動や態度を理解し、実践する。</p>
<p>教育目標4 主眼的、科学的に思考し、かつ創造的に問題や課題を探究し解決していく能力を養う。</p>	<p>生じている現象に深い関心を寄せ、科学的根拠に基づき、柔軟な思考力を発揮して、積極的に問題解決に向けて取り組むことができる。</p>	<p>(垂直軸) 看護、看護専門職の役割、責務・機能 (水水平軸) 問題解決能力</p>	<p>科学的に研究を進める上で必要とされる統計学の基礎的理論と技術を習得する。</p>	<p>看護を展開してゆく上の思考過程を技術的な根拠を踏まえて理解する。看護研究などを進める上で必須となる看護のエビデンスを理解し、看護過程を展開してゆく基礎的能力を養う。</p>	<p>看護を展開してゆく上の思考過程を技術的な根拠を踏まえて理解する。看護研究などを進める上で必須となる看護のエビデンスを理解し、看護過程を展開してゆく基礎的能力を養う。</p>	<p>看護実践現場が置かれた状況を理解し、問題解決へ向けた自分の意見を効果的に主張し、研究の実施を通じて看護実践と看護研究の関連性を理解する。看護上の問題を解決する為の管理的戦略や資源を理解する。</p>
<p>教育目標5 保健医療福祉システムの中で、他職種の重要性を理解して、目標に向けて推進できる基礎的能力を養う。</p>	<p>保健医療福祉システムの中で、自己責任を自覚し、他職種との連携・協働の重要性を理解するとともに、チームの一員として協働、活動に参加できる。</p>	<p>(垂直軸) 看護、看護専門職の役割、責務・機能、対象の生活を取り巻く環境、相互行為、問題解決能力、より高い水準の健康を旨とする</p>	<p>看護を取り巻く領域が機能する社会的成り立ち、仮説や理論がどのようにつくられて展開されたのかなどの基礎的知識を習得する。</p>	<p>現代社会における人々の健康と生活を守る保健医療福祉システムを理解する。</p>	<p>保健医療福祉システムにおいて看護職および他職種の仕事・機能を理解する。</p>	<p>チームアプローチにおける看護職者としての自己の役割・責任を認識し、看護職者間ならびに他職種・地域と連携、協働して活動に参加できる。</p>
<p>教育目標6 国際的な視野を養い、多様な社会や価値観に基づく社会の中で、人々の健康に貢献しながら自己の成長を希求する。</p>	<p>文化の多様性の理解にもつとって看護活動が展開できるとともに、生涯にわたって自己学習、自己評価をし続ける行動や態度をとることができる。</p>	<p>(垂直軸) 看護、対象の生活を取り巻く環境、看護の対象である人間、人間の尊厳、より高い水準の健康をめざす</p>	<p>語学力およびコミュニケーション能力を高めるための学習計画を立て、その学習計画を実行し、自己の学習成果を評価する。</p>	<p>多様な文化における価値観の違いとその背景を理解する。</p>	<p>多様な文化の中で生じる様々な健康問題について理解し、文化を反映した看護活動の必要性および看護方法を理解する。さらに看護職として自己の各職種の役割を深く理解し、自己の課題に取り組む方法を考えることができる。</p>	<p>現在行われている国際的な看護活動および世界各地の看護について理解を深める。将来に対する自己の課題を明らかにすることができる。</p>

表5 学年目標

()は教育目標とレベル

卒業生の特性	1学次目標	2学次目標	3学次目標	4学次目標
1. 人間の生命の尊厳、倫理観を備えている。	<ul style="list-style-type: none"> ・生命や生活・人間と自然・文化との相互作用について理解する。(1-LI) ・生命科学、生命の尊厳について理解する。(3-LI) ・看護・医療倫理の基本を理解する。(3-LIII) ・看護の対象である人間を概念的に理解する。(2-LII, III) ・看護における理論的知識や概念を理解する。(3-LI) ・生命科学、生命の尊厳について基本的な知識を理解する。(3-LI) 	<ul style="list-style-type: none"> ・生命倫理に関する歴史や課題について理解する。(3-LII) 	<ul style="list-style-type: none"> ・人間を、身体的、精神的、社会的統合体として多角的視点に立って理解する。(1-LII) ・対象者の尊厳、権利について理解する。(3-LIV) ・実践場面において倫理的葛藤が生ずる状況があることを理解する。(3-LIV) ・看護における基本技術並びに人間関係を構築し、対象の抱える様々な健康上の問題を解決するための基礎的な看護を實踐する。(4-LI, II) 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人、家族、地域の多様性について理解する。(1-LIII) ・倫理的意思決定プロセスを理解する。(3-LIV) ・対象者の自己決定を支援する。(3-LIV) ・発展的な看護技術および特殊な状況における援助的人間関係を形成する。(2-LIV) ・集団、地域社会の健康上の問題や課題を明らかにし、健康の保持増進、疾病の予防を目的とする看護援助を實踐する。(2-LIV) ・看護の対象である人々の権利を尊重し擁護するとともに、倫理的判断に基づき行動をとる。(3-LIV) ・看護実践現場が置かれた状況を理解し、問題解決へ向けた自分の意見を効果的に主張し、研究の実施を通じて看護実践と看護研究の関連性を理解する。(3-LIV) ・保健医療福祉チームの一員としての自覚を持ち、他職種と連携協働し活動する。(4-LIV・5-LIV) ・対象のより高い健康を目指すための他職種との共同研究の重要性を理解する。(4-LIV・5-LIV)
2. ヒューマン・ケアリングの視点に立った看護実践能力を有する。	<ul style="list-style-type: none"> ・論理的思考の成り立ち、仮説や理論がどのようにつくられ、展開されているかななどの基礎的知識を理解する。(3-LIII) ・コミュニケーションや問題解決に必要な論理的思考を實踐する。(4-LI・5-LIV) ・集団におけるリーダーやメンバーの役割や機能を理解する。(5-LIV) ・看護の概念を押しさえつつ看護の役割、責務、機能を理解する。(4-LIII・5-LIII) ・対象の生活や看護を取り巻く、社会の成り立ちと現状を理解する。(5-LI) 	<ul style="list-style-type: none"> ・看護を展開していく上での思考過程を理解する。(3-LI, III) ・健康についての考え方及び、健康状態の変化と疾病や生活との関わりについて理解する。(2-LII, III) ・看護における援助的人間関係を理解する。(2-LII) 	<ul style="list-style-type: none"> ・科学的に研究を進める上で必要とされる知識を修得する。(4-LI, II) 	<ul style="list-style-type: none"> ・看護実践現場が置かれた状況を理解し、問題解決へ向けた自分の意見を効果的に主張し、研究の実施を通じて看護実践と看護研究の関連性を理解する。(3-LIV) ・保健医療福祉チームの一員としての自覚を持ち、他職種と連携協働し活動する。(4-LIV・5-LIV) ・対象のより高い健康を目指すための他職種との共同研究の重要性を理解する。(4-LIV・5-LIV)
3. 他職種と連携、協働できる基礎的能力を有する	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションや問題解決に必要な論理的思考を實踐する。(4-LI・5-LIV) ・集団におけるリーダーやメンバーの役割や機能を理解する。(5-LIV) ・看護の概念を押しさえつつ看護の役割、責務、機能を理解する。(4-LIII・5-LIII) ・対象の生活や看護を取り巻く、社会の成り立ちと現状を理解する。(5-LI) 	<ul style="list-style-type: none"> ・現代社会における対象の健康と生活を守る保健医療福祉システムを理解する。(5-LII) ・保健医療福祉システムにおける他職種の役割、責務、機能を理解する。(5-LIII) ・看護チームの一員としての役割を担う。(5-LIV) 	<ul style="list-style-type: none"> ・保健医療福祉システムに参加し、看護観を持ちつつ積極的かつ論理的に他職種とコミュニケーションがとれる。(4-LIII・5-LIV) 	<ul style="list-style-type: none"> ・保健医療福祉チームの一員としての自覚を持ち、他職種と連携協働し活動する。(4-LIV・5-LIV) ・対象のより高い健康を目指すための他職種との共同研究の重要性を理解する。(4-LIV・5-LIV)
4. 地域社会、国際社会に貢献できる資質を有する	<ul style="list-style-type: none"> ・語学力及びコミュニケーション能力を高め学際的な視野を有する。(6-LI) 	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な文化における価値観の違いとその背景を理解する。(6-LII) 	<ul style="list-style-type: none"> ・国際的な看護活動及び世界各地の看護について理解する。(6-LIV) 	<ul style="list-style-type: none"> ・特殊な状況において発揮できる看護の基本的実践能力を持つ。(6-LIII) ・自らの看護師としての課題が明確化でき、生涯学習を継続する態度がとれる。(6-LIV)

表6 内容配置表 小児看護学概論の一例

学号	小一前-1	小一前-2	小一前-3
科目番号	小一前-1	小一前-2	小一前-3
標目	子どもを取り巻く家族・社会を知り、小児看護の目的と役割・責務・機能を理解する。	子どもの形態的・機能的・精神的運動・心理社会的発達を理解する。	新生児、乳児、幼児、学童、思春期の子どもたちの生活を理解する。
内容の諸要素	人間の生命の周期、倫理観、全人的理解、役割・責任・責務、保健・医療・福祉システム、他職種との連携	肉体的環境、外的環境、人間発達、連続性としての健康、人間のからだの仕組み、生活統合体としての人間	多様で変化した続ける環境と相互行為をもつ、外的環境、人間の生活を整える、生活統合体としての人間、国際的視野
強調するカリキュラム軸	垂直軸：看護専門職の役割・責務・機能 水平軸：人間の尊厳（人権を尊重して擁護する立場）	垂直軸：健康の状態看護の対象である人間 水平軸：生活統合体としての人間	垂直軸：対象の生活を取り巻く環境 水平軸：生活統合体としての人間
概念論	看護師の役割・責務・機能、意思決定、システム論、アドボカシー	成長・発達し続ける小児発達論、人間発達論、愛着理論、認知発達理論	健康の概念システム論
主要内容学習内容	小児医療・看護の変遷と課題、小児を取り巻く家族と社会、家族関係と家族のライフステージ、家族の発達段階、母子保健の動向と小児保健統計、児童憲章、児童福祉法、母子保健法、学校保健法、健やか親子21、児童虐待の防止に関する法律、マルトリートメント、子どもの権利条約、アドボカシー、インフォームドアセント、パートナーリズム、保健、医療、福祉、教育との協働	小児看護の原則、連続性と臨界期、影響因子、形態的成長(身長、体重、頭囲、胸囲、骨、生歯、身体バランス)機能的発達(呼吸、循環、消化、体温調節、腎機能・水分代謝)精神運動機能の発達(粗大運動、微細運動)、心理・社会的発達(情緒、言語、社会性、認知、思考)エリクソン発達段階、ポウルピー愛着理論、ピアジェ認知発達理論、性的発達、発達評価と環境アセスメント	新生児、乳児期の生活、栄養、幼児期の生活、日常生活の自律、事故防止と安全教育、遊びの発達と社会性、予防接種、学童期の生活、小児の生活習慣病、いじめ、不登校、思春期の生活、性の感染と教育、健康増進と健康問題、子どもの発達と家族関係、世界の子どもたちの生活、貧困と労働
関連する基礎・専門基礎・専門科目	社会学、家族関係論、家族発達論、生命倫理、公衆衛生、保健行政論、家族看護学	心理学、哲学、人間関係論、人間発達学、人体の構造・機能、臨床心理学、認知発達学	文化人類学、自然環境と生活、家族ライフステージ
科目名	小児看護学概論	小児看護学概論	小児看護学概論

小児看護学概論：目標
 子どもの成長発達、日常生活について学び、小児看護の対象である子どもを理解するとともに、子どもを取り巻く家族・社会を知り、小児看護の目的と役割・責務・機能を理解する。

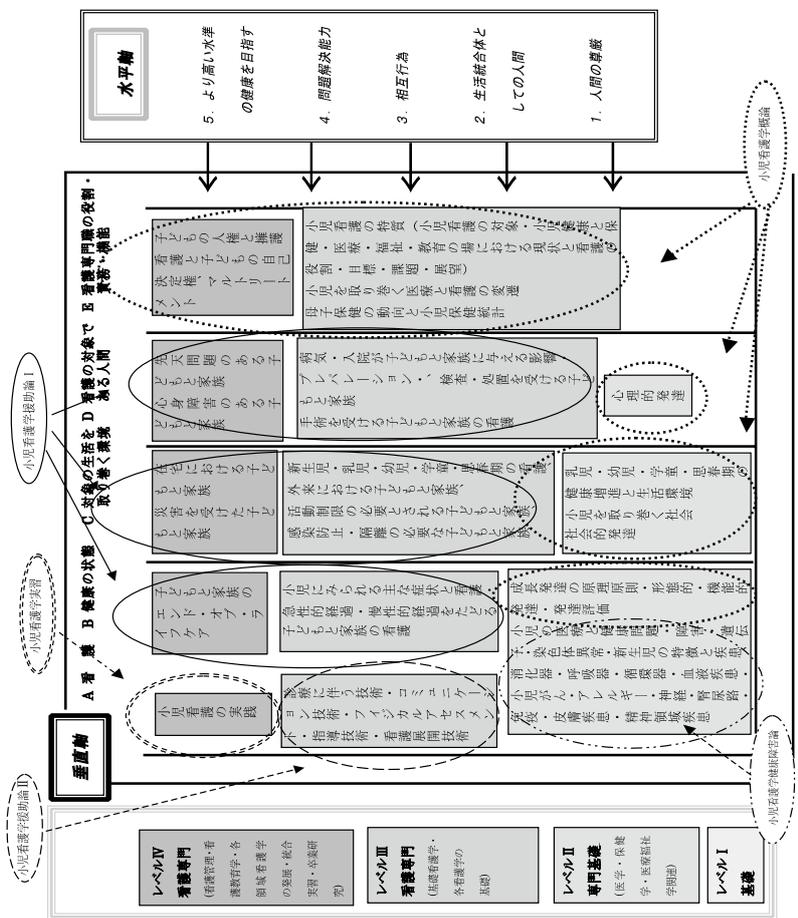


図2 小児看護学 理論的枠組みに基づくカリキュラム軸 一例

9. 新カリキュラムの構築内容の確認

最終的な科目内容原案を作成し、カリキュラム再構築の課題としたところが改善されている内容か、教育理念・目標、卒業生の特性との関連、科目名、授業形態などを確認した。

再構築の重要課題であった教育理念、教育目標と科目の整合性については、教育理念・目標を基盤として内容の諸要素、カリキュラム軸、学習内容の配置、科目名決定に至るまで、一連の系統性を意図して作成してきた。卒業生の特性から特徴づけられる科目として、特性1「人間の生命の尊厳、倫理観」については人間理解と倫理観を育成できるように「保健・医療概論」「生涯発達論」「健康医療システム」「看護倫理」を加え、オムニバス形式とした。特性2「看護実践能力」については、基礎看護学実習を一年次から開始し各看護領域に看護技術を中心として学ぶ科目として「援助論Ⅱ」を置き、時間数を増やした。特性3「他職種との連携、協働」については「チーム医療概論」「臨床栄養学」「臨床薬理学」「臨床検査概論」を加え、一部、他学科との合同授業でディスカッションできる機会を増やした。特性4「地域社会、国際社会への貢献」については「医療英語」「国際保健学」「災害看護学」を加え、在宅看護論で保健師教育に発展できる地域社会の特性を加えた。

課題とされた2つ目の教養科目の不足については、人間と文化、社会と制度、自然と科学、外国語、スポーツと健康の5分野から、看護教育に必要な人間理解の基礎となる科目、更には、経済、制度、文化など多角的に選択できるようにした。

課題とされた3つ目の科目間の重複と不足については、最終的にカリキュラム委員会で専門基礎科目、専門科目の学習内容を確認して過不足がないように調整した。看護実践に必要な知識の統合ができる能力を育成するためには、必修科目115単位になった。

課題とされた4つ目の科目の進度と実習時期の順序性のずれについては、看護領域ごとの内容配置で検討され調整することができた。

IV. おわりに

本学の理念や目標を基盤として、カリキュラムの再構築を行った。今回は、方向づけの段階から形成段階までの作成過程と再構築したカリキュラムの概要について報告した。

現在、新カリキュラムが開始し機能的段階に入った。今後、実際の運用を行いながら、一年ごとに検討、評価を繰り返し、社会の要請にこたえられる看護教育を目指し、カリキュラム改革を行っていく。

今回の再構築に際し、ご協力、ご指導いただきました皆様に感謝の意を表したい。

文 献

- 1) 文部科学省：看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標：2004.
- 2) 厚生労働省：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書：2007.
- 3) 文部科学省：大学における看護実践能力の育成に向けて：2003.
- 4) 文部科学省：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会報告書：2009.
- 5) G Toires, M Stantan : Curriculum Process in Nursing. 1988, 近藤順子, 小山真理子訳：看護教育カリキュラム その作成過程. 医学書院, 2003.
- 6) 杉森みど里, 舟島なをみ：看護教育学（第4版増補版第2刷）. 医学書院, 2009.
- 7) 宮崎美砂子, 山本利江：学士課程看護基礎教育のカリキュラム改革. 千葉大学看護学部紀要 (29), 49-54, 2005.
- 8) 前掲書：6) p121-123
- 9) Jacqueline Fawcett / 大田喜久子・筒井真優美 監訳：フォーセット看護理論の分析と評価. 医学書院, 2008.

Process of Reconstructing the Nursing Curriculum Counselors

NAGATANI Tomoe, SASAKI Yoko and TAKAOKA Tetsuko

Abstract: The Nursing Department of our university instituted a new curriculum in April of 2012. In 2009, some faculty members raised questions about the existing curriculum, concerning consistency between the educational philosophy and the content of the education, duplication of content among curriculum courses, and the degree of progress of practical training. With this background, it was decided to restructure the curriculum drastically by 2012.

The curriculum was reconstructed to fill the needs that society seeks from nursing colleges, in accordance with the educational philosophy of the university. Characteristics of the curriculum are placing greater importance on fostering human resources equipped with (1) a sense of ethics and appreciation of the dignity of human life, (2) an ability to practice nursing from a viewpoint of human caring, (3) fundamental abilities which allow one to cooperate and collaborate with other occupations, and (4) an ability to contribute to both local and international society. Curriculum reconstruction proceeded through these phases: main concept of nursing, various aspects of the contents, educational philosophy, educational targets, target for each grade, curriculum axis based on a theoretical framework, target levels, and draft proposal for curriculum courses.

In the process of the reconstruction, we changed the existing curriculum that integrated education for both public health nurses and regular nurses into that for regular nurses following a partial revision of the regulation specific for vocational schools for public health nurses, midwives and sick nurses. As a future perspective, we will strive to improve the quality of nursing education further while having discussion and evaluating the curriculum in stages throughout the whole organization.